「鹿島神宮の祭儀と空間構成について」に対する討論

(藤沢彰著 日本建築学会計画系論文報告集, 第459号, 1994年5月号掲載)

DISCUSSION ON RESEARCH ACTIVITY PUBLISHED AS "FESTIVALS AND
CONSTITUTION OF RITUAL SPACE IN KASHIMA JINGU SHRINE"(Akira FUJISAWA., Journal of Archit. Plann.
Environ. Engng. AIJ, NO.459 MAY 1994)

黒田 龍二

Ryuji KURODA

The meaning and the importance of above paper are discussed as following items.

- 1) Disagreement of historical materials on their time in above paper.
- 2) Historical meaning of the constitution of ritual space in KASHIMA JINGU.
- 3) What point of view does Dr. Fujisawa have in above paper ?

Keyword: Kashima-jingu-shrine, Shinto-festivals
鹿島神宮、神社祭儀、

はじめに

祭儀から社殿構成の意義を読み解く作業は、神社建築研究の一つの有効な方法である。しかし、その作業がどのような観点から行われるのかによって、得られた結論の評価はおのずと異なる。通常は、研究の視点や方法が冒頭で示されることにより、結論の意義や評価が導かれると思われるが、この論文では視点や方法の提示が行われていない。藤沢氏がわざわざそのようなことを書く必要もない通常の実証的歴史学の立場をとっているのだと仮定すると、この論文には非常に基本的な欠陥があると思われる。

そこで、以下の疑問についてお答え頂くとともに、氏の立場をお示し頂きたい。

1. 時代の整合性

「1. はじめに」では、この論文の目的が、「近世期の社殿を対象として、そこで行われていた祭儀を分析することにより、鹿島神宮の祭祀空間の構成について考察

することを目的とする」と書かれている。この目的に沿って、祭儀は「5. 祭儀の重層性」において、「祭神の性格・祭儀の性格からおおよそ三つに分類」される結果となる。従って、ここでは、

①社殿、②祭儀、③祭神の性格・祭儀の性格

の3点が考察されていることになる。この三点を相互に関連するものとして考察するのであれば、歴史学的研究においては、それらの年代は推定的であるにしても一致していなければ意味がない。①については、前掲の如く近世の社殿を対象とすることが明記されている。②については、「4. 近世期における祭儀」に若干の中世史料が引かれているが、祭儀の具体的な記述に用いられる史料は近世のものが使用されていて問題はない。しかし、③のうち先ず祭神の性格については、本論の相当な部分を占める「3. 鹿島神宮の祭神」の記述において、3.1項と3.2項は記紀、風土記をはじめとする古代史料、3.3項、3.4項は古代史料と中世史料によって記述されている。次に祭儀の性格の年代は「5. 祭儀の重層性」において「祭神の性格」に関連して分類されているので、

* 神戸大学工学部建設学科 助教授 学術博士

Assoc. Prof., Dept. of Architecture and Civil Engineering,
Faculty of Engineering, Kobe Univ., Ph.D.

祭神の性格の年代観と同じである。よって、③の年代が著しく古いことになる。氏は、「3. 鹿島神宮の祭神」末尾近くで「このような古代からの鹿島神に対する複合的な信仰形態は、多少の変容をとげながらも近世に受け継がれて行く」と述べるが、論証されてはいない。これは話が逆であって、近世史料によって祭神の性格が分析され、それが古代に遡る可能性が追求されねばならないのではないか。私は、古代と近世が連続しているという氏の理解を否定はしないが、特に近世神道家の古代文献研究と復古的風潮を考慮すると、氏の理解の提示方法には歴史学の手続き上、大きな問題があると思う。

2. 空間構成の歴史性

結論では、祭儀の重層性とそれに対応した祭祀空間の構成が述べられる。しかし、前項で指摘したように、扱う対象の時間軸に整合性がないので、そのような空間構成が、何時、どのような理由で成立したのか、またその構成を明らかにしたことは、神社建築史の上でどのような意義をもつのかというような歴史的評価が不明になっている。歴史的評価を行う必要がないのなら、その理由をお聞きしたい。

また、もしこの論文の時間軸を江戸時代に限るとするのなら、ここで行われた作業は、江戸時代の状態を整理したに過ぎないこととなろう。そうすると、現在各地に残る一般的な神社祭礼は江戸時代の状態を残しているものが多いので、何故特に鹿島神宮が取り上げられるのか、江戸時代における意義を示す必要がありはしないだろうか。

3. 立脚点と論文の意義

前項、前々項の疑問は、著者の視点、考察の方法、思考の枠組み及びその枠組みにおける先行研究が示されさえすれば、ほぼ水解する。もしこの論文が、先行研究とは無縁の独立した意義を有するのなら、なおさらその意義を提示する必要がある。結局、この論文の意図と意義は、このままでは理解できないし、ことさらに説明する必要のない歴史的な研究に属するとした場合は、上記のような大きな欠陥があると思う。

(1994年7月14日原稿受理, 1994年11月8日採用決定)